

# 奇怪なソ連は脅威でないの大合唱

「現実主義者」  
その「新」と「旧」  
(3) **机**  
中川八洋

## 現状肯定の旧現実主義者

「ソ連は脅威でない」と主張し続けている猪木正道氏ら「猪木グループ」については、これまで「現実主義者」と呼ばれてきた。このため、彼らは決して空理空論即ち観念的なことはいわれないはずだ、と一般にはまだ思われていた。しかし、「猪木グループ」を今日「現実主義者」と見なすことは全く間違っているし大変な誤解である。六十年代から七十年代にかけて、正に空想家の夢想のような「非武装中立」論をふりまわす「進歩的文化人」に対比した限りにおいてそう呼ばれるにすぎない。

彼らを、より正確に表現するならば、現実が存在する「現状を」肯定(する)主義者、にすぎなかった。すでに存在する日米安保条約の日米関係を重視する日本政府の外交・防衛政策の現状を、それでよいではないか、と肯定するだけの論理であった。つまり、理性も知性もない狂信状態の「進歩的文化人」からみれば、真の「現実主義者」と「現状肯定主義者」とをそれほど区別する必要が当時なかっただけであった。二空母機動部隊をもつ米国の第七艦隊が極東に存在している以上、日本政府の選択している外交の現状の肯定でも日本の安全保障の確保ができていたからである。

ところが、極東ソ連軍が大々的に増強されているのに対して、逆に米軍がすでに二空母機動部隊をインド洋にスウィングし(七十九年十月以降)、かつ中東有事の際には残りの一空母機動部隊も中東にスウィングされること(六月初旬、ハワイで日本政府に通告)になった今、日本政府の外交・防衛政策の現状には明らかに深刻な問題がある。つまり、この国際的な軍事情勢の現実に対して、日本政府の現状が不適切になってしまった。これが「現状肯定主義者」の

「猪木グループ」の考えが、論理的に支離滅裂になった主たる原因であろうか。

このことは、前々回(七月二〇日号)及び前回(八月三日号)で述べたように、「猪木グループ」の主張における現実の国際情勢の動きを無視するか、もしくは不勉強による国際情勢の把握が著しく貧困である傾向に、見事に浮き彫りされている。つまり、どこからみても「現実主義者」ではないのである。むしろ、観念主義的色彩を濃くしつつある。しかし、過去の彼れらに関するこの呼び方を敢えて踏襲するならば、「旧現実主義者」とするのが正しかろう。

## 左翼インテリとの結合現象

さて、この「旧現実主義者」は、現在の非左翼知識人に支えられた論壇の政治学分野での主流ではあるが、非左翼知識人の中では孤立化を深めつつある。すなわち、現在の我国における非左翼知識人は、少数派の「猪木グループ」などの「旧現実主義者」と、それ以外の多数派の「真(新)現実主義者」にほぼ二分されているといえよう。

ただ、この少数派が論壇の主流であり、多数派が反主流もしくは傍流であるというアンバランス現象の事実が注目しておくべきである。また、このことは、「旧現実主義者」の行動と将来を考えるには見落してはならない重要なポイントでもある。つまり、少数が多数を圧して主流の座にいるのだから、極めて不安定でありその地位の維持は極めて難しい。例えば、その主流を維持するために、「猪木グループ」のように、学問信条によらずして政治的配慮をした発言が目立ってきたりする。さらには、非左翼人の論壇だけならなくマスコミ全体として多数になる

なお、「旧現実主義者」も政府の外交・防衛政策の批判もしており、必ずしも現状肯定とはいえないと指摘する人も少なくない。確かに、彼れらも「日米同盟」や「非核三原則」に関する鈴木首相の対応については非難をしている。

しかし、「旧現実主義者」の鈴木首相の論理はやはり現状肯定から導かれている。鈴木首相が「事前協議があればノー」というと発言したように現状の米国の核寄港にすら反対であり、日米安保条約に基づく現状の日米同盟にまで批判的であるからだ。換言すれば、自民党政府としてはいはならぬ現状を肯定する鈴木首相に対して、現状肯定のために「旧現実主義者」が反論しているにすぎない。

うとしてか、左翼インテリとの結合、あるいは左翼の旗幟を鮮明にしている新聞や雑誌からの誘いに快く応じることになる。彼れらが「現実主義者」と呼ばれていた逸

## 真(新)現実主義者とは

さて、政治学分野の論壇で傍流(反主流)であるために多数を誇りながら少数派と誤解されている「真(新)現実主義者」とはどのような特徴をもっている。

一、現実の国際情勢の激しい変動をより適切に理解しまた重視していること(よく勉強していること)  
二、現実の国際情勢に対して、必要であれば、現実の日本の外交・防衛政策の大幅な変更をすることに關して戦後タブーにとらわれない(現実をタブー視するより重視する勇氣をもっていること)  
三、やむをすれば現実離れの観念論に陥り易い大学人と異なり、現実や事実にしか興味のない実務の世界で生きている

去には全く見られなかつた現象である。例えば、これまでA新聞と対決してきた「旧現実主義者」達がこの一年近くいかに同紙面を賑わしていることか。  
特に、論壇全体の中ではすみの方に追いやられた左翼インテリは失地回復とばかりに、この「旧現実主義者」に対して熱烈な秋波を送っている。例えば、高島敏敏氏は次のようにいう。

「六十年代はじめから平和論者を批判するリアリズムの政治学を説いてきた永井鶴之助、中嶋滋雄の二人が同じように、ソ連の脅威を声高にいう人達を批判し、非軍事経済国家としての日本を世界のモデルとして押し出すことを主張していることである……、明らかに、保守派とされてきた人たちの中に、……野党批判から政府の牽制へと力点を移しつつある人達が生まれ出てきている。そのこの意味は、決して小さくない」(「朝日新聞(夕)」八十二年二月二十七日付)

また、山口定氏は「中央公論」の七月号が、……保守派の論客佐藤謙三郎氏の「改憲批判」を筆頭特集にした政治的センスは見事といえよう」と指摘している(「世界」八十二年八月号)。正に左翼インテリと「旧現実主義者」のランデブー現象が八十一年に生じ進展しつつある、といつてよい。

四、多数派の帯として横のつながりをもつてのグループ化されていくこと。  
現在の国際軍事情勢下の日本の平和確保という現実に対して、六十年代の野党対決のパターンのままに國內の論理を優先する「旧現実主義者」が、国際情勢を無視するという現実離れをしてしまし、「真現実主義者」の方が次第に國民の信頼をかち得つつあるのは当然の成りゆきだろう。

偉かな社会科学系大学人のみよりなる「旧現実主義者」と異なつて、「真現実主義者」の方はジャーナリスト、官僚(OB)、社会科学系大学人、人文科学系大学人、軍事専門家等圧倒的な多数に

21世紀